

死の灰

第五福竜丸の船員達は、その時何を思ったのでしょうか。どんな事を感じたのでしょうか。私にはわからないけど、きっと、不吉な予感がしたんだと思います。もし私が、第五福竜丸の船員だったとしたら、どんな事を思い感じたでしょうか。

私は、第五福竜丸を見て、思わず声をあげてしまいました。とても大きくて、少しでもさわると、ペンキがはがれそうでした。見あげて見るよりも、第五福竜丸に乗って、見おろす方が、とっても高い事がわかりました。船に乗ってみると、船員達がいっしょけんめいに働いている様子や、死の灰がふってきた時の様子が想像されました。船室内は、とてもせまくて、船長室だって、私が予想していた以上にせまかったです。よくあんな所でねられたなと、思いました。けれど、いっしょけんめい働くのだから、つかれば、そんなのどうってことないのかもしれない。私は、死の灰がふってきた時の苦しみ、どんなものか、よくわ



本当の苦しみというのを体験したわけではありません。だからこそ苦しんで来た人達にかわって、今度私達が、戦争や、原水爆を再びおこせなない様に、がんばらなければならぬと思います。「あの時代に生まれなくてよかった」と思っています。またいつか戦争や原水爆がおこるかかわりません。油断してはいけなないと思います。第五福竜丸は、そんな事を言っている様でした。

第五福竜丸と私たち

関屋綾子

ビキニの水爆被災事件以来、三〇年の月日がたつて行きました。第二次世界大戦に於ける敗戦、又それに先だつ広島、長崎の原爆投下の日その息づまる断末魔の实感を、アルプスに囲まれた静かな山の町、松本で過していた私は、大分意識的に追いつけぬ部分があったように正直のところ思うのです。

私が少女時代から属しているキリスト教婦人団体であるYWCAでは戦後非常に早い時機に全国から幹部の委員が東京に集まって、敗戦の重大事に直面して自らの、あり方に対する真摯な反省の時を持ってました。日本の歩んで来た道、また第二次世界大戦そのもの及びそれを大きく包んで流れて来た社会の動きの中であって、真剣な討議の中から、私達一人一人が、本当に自分の考え、判断というものを持つことの意味の重大さに思い到りました。そして自分の考えに立って、よき事はよしとして誤りに対しては「否」と言い得る個人として自己確立をめざすことこ

そ、真理の書を繕くものの責任であると思ひ至つたのです。そんな思いの中でたび重ねる話し合いを持ち乍ら、とうとう「核」否定の思想に立つ」ということを運動の中心的課題の先頭に立てたのは、一九七〇年の全国総会の時でした。そして翌年から「広島・長崎を考ふる旅」というプログラムを組みそれ以来一年も欠かず事なく十四年間毎夏若い人々を連れて意味深い旅を重ねて来ました。そして、近年では百人を超える参加希望者に、どうやって数を制限するかと心痛めるような有様です。

私が思ひかえし本当に意味深く思えることは、一つの事をくり返し掘りさげて行く作業の中で、何と多くの新しい発見、新しい意味を見出すことが出来るか、という事です。そのプログラムに添って国際団体としての責任をいく分でも果す事も出来たように思います。戦争中は敵味方の立場であった国々の者たちが、本当に真理を求め、その前にぬかずく事を知った時、

どんなにすばらしい平和への共同の精神に立つことが出来るかも、身をもって知りました。

第五福竜丸の真の意味を、私たちはそのような一すじの流れを広げ深める中で考えるようになってゆきました。一九五四年三月一日それは戦争の事態の中ではなかったのです。それにもかかわらず平和な海に漁に出た人々が突然死に直面しなければならぬという且つて人類の歴史が出会ったことのない事件がおきたのです。そしてその死の原因は、放射能の灰をあげた事であるという、まさに科学の前進をのみめざし続けて来た人類が、はじめて出会った驚愕でした。戦争のない事だけが平和とは決して言えないという事の意味をはっきりと思わせる事件です。たえず前進する人類の歴史の中に於る第五福竜丸の存在は、実に重大であると思ひます。私たちは、広島・長崎をふまえつつ、その事の意味を今日人間がさしかかっている人類全体の直面する危機意識を明確にするために、深く考えるべきだと思ひます。

(日本キリスト教協議会核問題委員会委員長・平和協会評議員)

寺門仁美

第五福竜丸を見て

かりません。口で言える様な、安っぽいものではないと思います。戦争だつて同じです。私達は今、「あの時代に生まれなくてよかった。でも、かわいそうだな」という一言で終わらせて、いいのでしょうか。もちろん、あの時代に生まれていなくてよかったと思うのは、だれもが思っている事だと思ふけど、本当に、それだけを考えていていいのでしょうか。私は、まちがいだと思ひます。私達は、

米ソの軍備拡張競争の為に、ビキニ環礁の島民が核の実験台になり、そしてただ通りがかった日本の漁船福竜丸までが核に侵されてしまった。広島原爆の千倍もある水爆を浴びれば、害があるに決まっている。なのに、水爆の被爆者を調査する理由でわざわざ人のいる島を選んだなどと、誰でも信じたことはないだろう。けれど、これはほんの三〇年前の事実なのだ。その後、核実験停止条約も結ばれたが、まだまだ少なからず異様な軍備増強の実験は行なわれている様だ。これでは、核戦争は起こらないと信じたたくても信じられなくなってしまう。日本は被爆国なので、その恐ろしさも、一番よく知っているはずだから、先頭に立って核戦争を反対しなくてはいけないと思う。そして、この第五福竜丸の犠牲は変えられない事実だから、その水爆実験で知ったエネルギーの威力を、平和利用に活用するべきだと思つた。

大杉 葉子(浦安高校三年)

編集後記

▼「日本も核保有国である、原爆落下の命令を下したのはレーガン大統領……」某高校がとつたアンケートの答えの一部分である。「原水爆の問題は入試にでてこない」のであまり関心はないらしい。「核兵器廃絶」など社会的な問題を口に出すだけで、「変わり者」と見られると言う。

▼現在は情報が多様化した時代だとよく聞く。次から次と新しい雑誌が生まれ、いつの間にかそれらの雑誌に囲まれていることに気づく。しかしそのほとんどの記事の内容は社会的な問題には乏しい。教科書さえ、人間が起こした歴史の汚点を曖昧にしか伝えない現在のなのでこれも仕方ないのかも知れないが溢れる情報に何を思い出すことができるのであろうか。

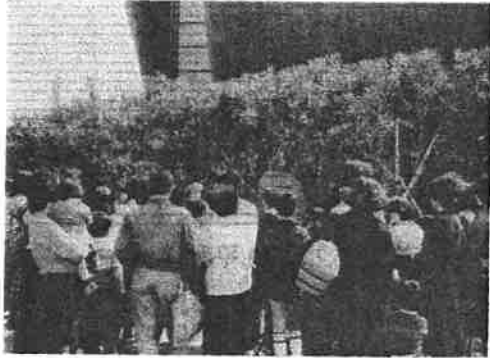
▼生命を持つすべてのものが住みやすい環境を築くために明日があるならば、人々がそれを真に担うなら、そのために情報が創られるなら！事実を伝えることが、自分の考えを口に出すことが、人を思いやる事が自然に出来るなら歴史は大きく発展するだろう。(も)

「船ってすごい」母と子でみた

寒さの中で七十四団体が見学

異常低温の三月だったが展示館はにぎやか。二月、三月の二カ月で七十四団体一万二千名。春休みと共に仲良グループの見学も増え卒業の記念に船に乗りたいたいと親友六人組で半日熱心に見学、バッチをみんながつけて福竜丸クラブを作ると胸をはる小学生もあった。

三月三日には埼玉生協のお母さん子どもたち二百人がバスで全県から見学、七色の虹の班毎に説明を聞き水爆の恐しさを口々に語



りあった。かけつけた本多理事のお話を久保山記念碑前で聞き、片道二時間余のバスの中では福竜丸について学習、帰路の車中では保

船体修理の中間報告行なわれる

59年度一千万円で夏以降工事着工

三月二十六日、月曜休館日の一日展示館で船体修理のこんだん会がもたれた。二カ月にわたり続けられてきた文化財建造物保存技術協会の測定調査の中間報告を聞き専門の意見を交換するもので、同協会関係者・専門家・都など十名が参加した。中間報告は修理箇所毎に写真、図面で詳細に行なわれたが、垂れ下った船首、はね上った甲板、肋骨など修復には外側に仮枠、また足場を組みブリッジ等一度解体し補強防腐を行なうなど当初予測より大規模な工法と工事になる可能性が強いことが指摘された。五月いっぱいかけて精密な報告書を作りあげそれをもとに協議をつみ重ねていくため、実際の

存のキャンバも訴えた。また、三月十八日には、町田市の特別青年学級の生徒七〇人が初めて見学、田沼理事の説明に目を輝かせ、いかに力をあわせて持ちあげたり、舵をたたきあったりして生きいきと船と対峙「船ってすごい」と楽しそうだった。

昭和59年度の業務委託契約実施

四月一日、昭和五十九年度の第五福竜丸展示館の管理運営にかんする業務委託契約が東京都と平和協会の間でなされた。昨年度の船体調査、本年度の船体修理と別途の経費支出の増大のせいか一般管理の本年度契約金は前年比の〇・六%増という異例の厳しいものとなった。

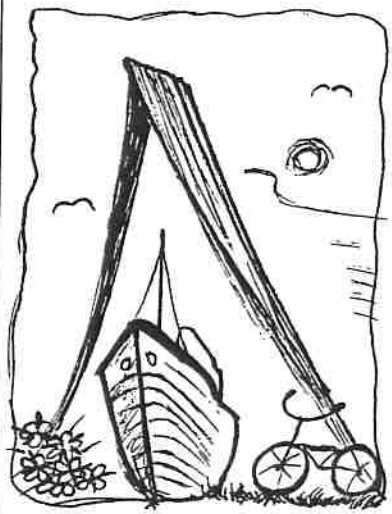
第59回理事会ひらく

四月九日、平和協会第59回理事会がひらかれ、ビキニ水爆被災30周年の記念シンポジウム(七月)の開催など討議すると共に、昭和59年度予算を決定した。(報告次号)

スライド「マーシャル」放射能の島を見ませんか

表記のスライドが平和協会におくられた。ハワイの太平洋情報センターの作成によるもので「一八コマ、英文の解説が付いている。一九四六年以来六六回にわたって行なわれたアメリカの原水爆実験

による自然と生活の破壊、流浪の生活、放射能障害、そして現在につづく後遺症、米軍核基地下の実態。強烈な火の玉キノコ雲、そして青い海、新聞の報道一つ一つに非核太平洋めざす人々の心が伝わる。三・一中央集会に参加したマーシャルの代表が持参したのをコピーしたもので、一見の価値がある。



第五福竜丸と

自転車

白井千尋

私の自宅の品川や職場から、この第五福竜丸展示館まで自転車でゆくと約一時間半。国電や地下鉄、バスを乗り継いでも、所要時間はそれほどかわらない。

だから、雨でも降らないかぎり第五福竜丸を訪ねるときは、いつも自転車である。

私の自宅や職場から第五福竜丸展示館まで自転車で通る約一時間半の広大な都心は、そのすべての街路、家々が、あの東京空襲の

火でなめつくされたところ。東京生まれで東京育ちの私には、その街路の一つ一つに、当時、私自身が目撃し、体験した空襲の惨禍の思い出が、しみついている。

新緑がいっせいに芽をふく春でさえ、私はそのかげに大空襲の血と涙のいっばいにしみこんだ街路のあとを見る。その街路を私はゆっくりと一つ一つ念を押すようにしてペダルを踏み、この展示館にたどりつくのである。

こうして、第五福竜丸を見ていると、無言のうちに反核平和、さまざまな生活の音が船体のいたるところから聞こえてくるように思える。私は自転車で何度、第五福竜丸を訪ねたか数えきれないほどだが、何度訪ねても、その都度、

新しい言いようのない思いを、この船は語りかけてくる。水爆被災の体験はそれほど深く、この船は語りつくせないほどのものを、その船体いっばいに、その船体のすみずみにかかえこんでいるのである。

私が生活や仕事に自転車を利用するようになった

たのは、八十二歳で病死した父が入院したときからだ。朝や夜、毎日看病にかよったその病院は、私の自宅からは、かなり離れていて交通の便もあまりよくなかった。それでやむを得ず自転車を買い、毎日利用するようになり、自転車のすばらしさを知るようになった。

父は幼いときから小僧や住み込み店員などで働き、あのファシズムの暗黒時代だった戦前、すでに反戦と無産階級の意識に目ざめていた。いつもからだを動かして働き、歩くのが好きだった。死去する入院の前まで、ながい間、銀座の街頭くつみがきをやっていた。「腕きき」のくつみがきでもあったのである。くつみがきを終えると毎日、銀座から品川の私の自宅まで、八十歳の年齢で歩いて帰るほど健康だったし、質ばくな性格の持ち主だった。

私は、そんな父の看病のために知った自転車のすばらしさを利用して第五福竜丸をしばしば訪ね、その奥深いたずまいを飽きることなく眺めつづけている。

(ジャーナリスト)

今も残りつづける放射能

激しい連続音、ガイガー・ミュラー・カウンターの数字は九二八カウント。一分間の放射能測定数である。三〇年前生まれた「死の灰」は、今も強い放射能を示した。三月二十八日「忘れまいぞ核」問題討論会では「死の灰と人間を考へる」と題して、安斎育郎氏による問題提起の後、実際に私たちの身の廻りにある品々の放射能の測定が行なわれた。合わせて、展示館に保管されている、第五福竜丸の乗組員が持ち帰ったビキニの「灰」も測定された。

冷蔵庫の解臭剤(放射線で臭いを分解)、陶材(人工の歯の材料)、NACプレート(タバコのニコチン減少を目的として放射性鉱物粉末を塗布したプレート)……。生活の中で、知らず知らず増え続けている放射能。「なくなれば……」と、野口邦和氏。

今もがんや甲状せん腺で苦しむマーシャルの住民。「もう放射能はだいじょうぶなの？」一見学に来る子どもたちからの、一番多い質問である。